明治期来日ドイツ人医師の貢献

鹿子木　敏　範

明治三年日本政府は、岩佐純、相良知安の進言を容れてドイツ医学の導入を決定し、[一]プロシヤ政府に二名の教師派遣を要請した。プロシヤ政府はまず陸軍軍医レオポルト・ミュラーの派遣を決定、さらにミュラーの推薦により海軍軍医テオドル・ホフマンを決定した。[二]二人の着任は普仏戦争のため一年遅れて明治四年八月[三]となった。

ミュラーは全権を委任されて東京医学校の創建にあたった。彼はその三年間の体験をまとめて、一八七六年（明九）七月プロシヤ政府宛に報告した。[四]この報告は入沢達吉によってごく短く紹介されたが、[五]これまで原文の所在は不明であった。[六]

『東京大学百年史』[六]によると、「明治五、六年までの実況を示す資料はほとんどなく」入沢の小文が唯一の資料であるという。

昭和五十九年十二月、ドイツ民主共和国（DDR）[七]の寒村メルゼブルクの国立文書館において、[八]明治初年の両国政府の交換文書、ミュラーの報告書、さらにシュルツェの報告書[九]を発見した。これによって初めてドイツ医学導入の経緯や、ドイツ人医師の貢献の事実が客観的に明らかとなった。

昭和六十二年八月再び DDR のメルゼブルクを訪れた際、一八八三年三月二日付の東京駐在ドイツ公使の〝日本におけるドイツの科学・文化の導入とその成果〟[一〇]と題する報告が見つかった。ミュラーの報告書は冒頭からおどろくほど厳し

い批判で貫かれているが、公使の報告も、文部省や大学が外人教師を急速に日本人教師と交代させる方針について率直に批判している。

明治四年以来、戦前の医学教育はドイツ医学が主流であり、教科書もドイツの原典か訳書を使用していた。上述の資料は、これまでその一端を大学の刊行物に紹介しただけである。今回初めて資料をまとめて、公式に報告したいと思う。

注

(一) 明治三年二月十四日(一八七〇、三、十五)、日本政府は北ドイツ連邦公使フォン・ブラントと「定約」を締結し、「一等の医者は東京医学校教師頭取」となり、「日本の医者は決して両人の上に立つべからず」と決めた。ただし相良知安の目標は西洋医学の追従ではなく、「十年ノ後必ズ彼邦ノ人ヲ入レズ、亦彼ノ書ヲ用ヒズシテ医道独立」を図ることにあった。この方針がのちに文部当局によって実践されている。

(二) Leopold B.C. Müller と Theodor E. Hoffmann

(三) 二人は一八七一年六月八日ベルリンを出立、ブレーメン、ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコを経て、八月二十三日横浜に到着した。(『東京大学百年史』二四三頁には「実際に来日したのは明治四年七月八日であった」と書いてあるが、旧暦の日付である。)台風のため上陸が遅れ、八月二十五日これまでの医学校長岩佐純の表敬を受けた。二十九日に寺島外務大輔、右大臣岩倉具視卿に面接し、さらに明治天皇に拝謁している。

(四) Bericht des Königlichen Ober-Stabsarztes 1ter Klasse Dr. Müller über die Gründung einer medizinisch-chirurgischen Akademie in Yedo (Japan)

(五) 入沢達吉「レオポルド・ミュルレル—本邦医育制度の創定者—」『中外医事新報』一二〇〇号(昭和八年)『東京大学五十年史』(昭七)も、同『百年史』(昭和五八年)も、酒井シズ『日本の医療史』(昭五七年)も入沢の小文を引用している。

(六) 通史一、二四四頁

(七) Deutsche Demokratische Republik

(八) Zentrales Staatsarchiv Merseburg

(九) Anlage zu Bericht No. 153

Notizen aus dem Bericht des Dr. Schultze über die Entwicklung der Medizinischen Akademie zu Tokio in der Zeit vom Januar 1875 bis Oktober 1877.

(10) Kaiserlich deutsche Gesandtschaft in Tokio, Tokio den 2. März 1883

（河綱大学教授・熊本大学名誉教授）